

述べれば、雛鶴も嬉しげに、金銀のかゝりしは、さして賞翫もなき物なれど、唐土より長崎へ來る伽羅の、また江戸迄持參し玉ひしを、私に給り候御志と申、遠來の名器、實に匂ひゆかしく候也、以來は他の櫛を用ゆまじと、源内に暇乞して、淺草さして歸りける、源内も立別れ、一瓢に一禮述て、我家をさして歸りけり、源内も満足せしとかや、此櫛世上にて源内櫛と名付、江戸一統、今以て流行す、されども其始る所を不知なり、

〔延喜式〕

四十一凡内命婦三位已上、聽用象牙櫛、

彈正略

〔類聚雜要抄〕四、彫櫛形、略圖

大治五年二月廿一日、中宮藤聖子立后料待賢門院令申請給時、以牙作天令進給了、

〔我衣〕元文中、象牙ノ櫛、カウガイハヤル、男女トモ身ヲ飾リ奢ルコトバ、享保以來甚シ、

〔嬉遊笑覽〕容一下、椀久物語、女乞食の事をいふ處、この淺ましき身となりても、黒髪そ、けず、一筋

元結かけて、象牙の半をれたるさし櫛、これくせもの、昔のおもはれ、略○中、その後、元文ごろ象牙櫛

并はやる、略○中、今も吉原にて、松葉屋半左衛門方には、正月二日遊女ども象牙の櫛をさし、昔の餘

風ありとぞ、

〔好色一代女〕六、暗女晝化物

人の目立たぬやうには、えけれど、顔に白粉、眉の置墨、丈長の平髻を廣疊に掛けて、梅花香の雫を含ませ、象牙の挿櫛、大きに萬氣を著けて拵へ、

〔賤のをだ卷〕其比、寶曆、象牙の櫛、并も流行たり、蒔繪などさせてさしたり、奇麗にてよかりき、

〔嬉遊笑覽〕容一下、四角めきたる大形に齒を深くひきたる櫛、米仲が獨吟歌仙に、關の地藏を唄にゆ

りすて、角櫛を下駄の齒などとさみせられ、是享保中寶曆頃にもはやりけるにや、其頃の晝にみ

ゆ、遊女の二枚櫛は、其後なり、櫛の形は同じ様なり、